

# サブライム美学とエドガー・アラン・ポーの風刺文学

福島 祥一郎\*

## The Sublime and Edgar Allan Poe's Satires

FUKUSHIMA Shoichiro\*

キーワード：エドガー・アラン・ポー，サブライム，視覚の欺瞞，ナショナリズム批判，風刺文学

### 1. サブライム美学と社会政治風刺

Stephanie Sommerfeld は Edgar Allan Poe の風刺小説 “How to Write a Blackwood Article” に関する論文の結末において、ポーのサブライム美学について次のように記している。

Poe's sublime is thus much more than a decorative Gothic remnant and lies at the core of his critique of American modernity because it refuses the experience of immediacy, questions the notion of human mastery, and problematizes the modern world order by dramatizing that sublime objects as media, too, have agency. (42)

ポーのサブライム美学が「彼のアメリカの近代性への批判の中心に位置するもの」とする指摘は、なかなか興味深いものがある。J. Gerald Kennedy の *Strange Nation* (2016) にも見られるように、近年、ポーの社会・政治批評はより注目を集め、特に

ポーのアメリカのナショナリズム批判や拡張主義政策批判についての議論が盛んにおこなわれている。しかし、ポーの社会・政治批評がより関心を引くのは、その批評がしばしばサブライム美学の認識方法を批判することから成り立っていることであり、社会・政治批評の理論的根拠を、認識論的な欺瞞に見ていることではないだろうか。

例えば、1846年1月に発表された“The Sphinx”において、ポーはアメリカ民主主義批判を展開するが、そこで根拠として示されるものは、次のような「近視眼的 (myopic)」なくもの見方>が持つ欠陥である。

... the principal source of error in all human investigations, lay in the liability of the understanding to under-rate or to over-value the importance of an object, through mere misadmeasurement of its propinquity. (CWIII 1249-50)

「対象が近い距離にあることをはかり損ね、その対象の重要性を過少評価したり、過大評価したり

\*理工学部共通教育群講師 Lecturer, Division of Liberal Arts, Natural, Social and Health Sciences, School of Science and Engineering

してしまうこと」——引用以降の文章にて、ポーはこの過誤が民主主義の問題についても当てはまると語る。そして、近視眼的な民主主義の評価に終始し、遠い将来、民主主義が隅々まで普及した時に起りうる影響について真剣に考えている政治学者が皆無であることを嘆く。

この視覚の問題は当時アメリカを席卷していたアメリカ的なサブライム (American Sublime) が抱える問題とその構造を一にしている。

伊藤紹子が端的に述べているように、<アメリカン・サブライム>の経験の核とは、「丘の上で、アメリカの運命である西を見遙かす詩人が、見る行為における感覚の統一の中で眼球となり、丘と彼方の地平線との神秘的な合一を果たした」(103) した上で、「自我の無化による I=eye の無限への変貌」(103) を遂げることにある。そこで問題となるのは、感覚の無限性によって、見る対象を包摂してしまうことだ。眺める側は、自らが感じている崇高性が対象の内にあると錯覚し、本来それが自分の理性の無限性によるものであることに思い至らないのである。

ポーの批評では、この対象の認識の仕方の問題をさらに敷衍し、「明白な使命 (Manifest Destiny)」という自己正当化の論理によって拡張主義政策が跋扈する中で、人びとが容易にナショナリズムに飛びつき、自分たちの社会体制である民主主義というシステムが持つ良き点と悪しき点を冷静に見ることができない理由として語っている。当時の状況を思うとき、ポーの慧眼とその論の射程の広さは瞠目に値する。

## 2. 視覚の欺瞞性、認識論的視差

確かに、ポーは厳しい資本主義アメリカ社会の中で生き残っていくため、したたかな戦略のもと、例えばセンセーショナリズムを批判し、それを嗤いつつ、そのセンセーショナリズムを利用するというような顔を持っていた。そうした点を強調すれば、ポーの批評は結局のところその場その場で相手を見ながら展開される戦略的批判 (あるいは非難) に過ぎず、等閑に付してもかまわないように見えてしまう。また、笑劇 (farce) における風刺は、その笑いの度が強すぎる場合には、しばしば風刺の部分の重みが減殺され、そこに人々の関心が向かなくなっ

てしまうという傾向もある。

だが、ポーの批評は決して場当たりのなものではない。ケネディも指摘するように、1839 年以降、特に 1842 から 43 年頃を境として、作品を経るごとにポーの文学はその底流に揺るぎない批評的視座を形成していったように思われる。特に、44 年以降、ポーが自身の物語やスケッチにおいて明確に <視覚の欺瞞性> について取り上げ、それを繰り返して描いたことは、もう一度きちんと確認しておく必要があるように思われる。

ポーの最も人口に膾炙した探偵小説である“The Purloined Letter” (1844 年 9 月) における次のような地図の挿話は、ポーの問題意識をわかりやすく私たちに伝えてくれる。少し長いが引用する。

“There is a game of puzzles,” he [Dupin] resumed, “which is played upon a map. One party playing requires another to find a given word—the name of town, river, state or empire—any word, in short, upon the motley and perplexed surface of the chart. A novice in the game generally seeks to embarrass his opponents by giving them the most minutely lettered names; but the adept selects such words as stretch, in large characters, from one end of the chart to the other. These, like the over-largely lettered signs and placards of the street, escape observation by dint of being excessively obvious; and here the physical oversight is precisely analogous with the moral inapprehension by which the intellect suffers to pass unnoticed those considerations which are too obtrusively and too palpably self-evident. (CWIII 989–90) (下線部は引用者による)

この挿話はそのまますべての推理の核心である有名

な「盲点原理」の説明ともなっているが、私たちにとって重要なことは、これが<近視眼的なものの見方>の批判にもなっているという点である。地図の端から端まで広がる名前を見つけようとすれば、それは細部にフォーカスしていたのでは決して発見することはできない。そこにあるということと、それを知覚するということの絶対的な乖離——この挿話は事件解決の鍵であるとともに、いわばポー文学の鍵ともなっている。

この<ものの見方>の基本原理は同じ年の3月に発表されていた“Spectacles”においても展開されている。物語のプロットとしては、近眼の語り手がある女性に「一目ぼれ」するが、その若く美しいと思っていた女性は実は老婆であり、かつ自分の曾曾祖母であった、というなんとも他愛もないものである。だが、その冒頭部分は、磁気感応による他人との電氣的共感という当時流行していたポピュラー・サイエンスへの揶揄ともなっていて、興味深い。

Many years ago, it was the fashion to ridicule the idea of “love at first sight;” but those who think, not less than those who feel deeply, have always advocated its existence. Modern discoveries, indeed, in what may be termed ethical magnetism or magnetæsthetics, render it probable that the most natural, and, consequently, the truest and intense of the human affections, are those which arise in the heart as if by electric sympathy—in a word, that the brightest and most enduring of the psychal fetters are those which are riveted by a glance. The confession I am about to make, will

add another to the already almost innumerable instances of the truth of the position. (CWIII 886-87) (下線部は引用者による)

### 3. おわりに

先に挙げた“The Sphinx”とともに、これらの例はポーの視覚的な問題への関心、すなわち、認識論的「視差」への関心を明確に私たちに教えてくれる。加えて、こうしたポーの問題意識は、そのほかの、それ程明示的には語られていないポーの物語群においても重要な位置を占めているのではないかと思われる。ポーとカントを同じ俎上で考え、二人の美学上における問題意識の共通性を探ることは、いまだ価値があることではないだろうか。ポーの社会・政治風刺について注目しつつ、それをポーが捉えていた同時代の認識論的問題との関連について今後考えていきたい。

### 引用文献

- Kennedy, J. Gerald. *Strange Nation: Literary Nationalism and Cultural Conflict in the Age of Poe*. Oxford UP, 2016.
- Poe, Edgar Allan. *Collected Works of Edgar Allan Poe: Volume II and III*. Edited by Thomas Olive Mabbott. The Belknap Press of Harvard UP, 1978.
- Sommerfeld, Stephanie. “Post-Kantian Sublimity and Mediacy in Poe’s *Blackwood Tales*.” *The Edgar Allan Poe Review*, Vol. 13, No.2, Fall 2012, pp. 33-49. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/41717104>.
- 伊藤紹子『ディズナル・スワンプのアメリカン・ルネサンス——ポーとダークキャンオン』音羽書房鶴見書店、2017。

